

## 地域づくりへの参加で育つ高校生たち —学力とシティズンシップの発達—

首都大学東京 特任教授

宮下 与兵衛

### はじめに

ユネスコは、子どもたちに3つの参加—学校運営への参加，社会への参加，授業への参加—を保障するように教師たちに呼びかけてきた<sup>i</sup>。それは、子どもたちが学校の中で，社会の中で，授業の中で主人公として育ち，みんなと力を合わせてより良い学校，より良い社会をつくっていける主権者・市民になっていくことを目指している。ここでは子どもたちが社会参加することによって，どのような力を発達させたのか，3校の高校の事例から分析してみる<sup>ii</sup>。

### 1. 高校生と地域住民の話し合い， そして地域づくり参加の取り組み

#### (1) 長野県辰野高校の生徒会の地域活動

長野県辰野高校では，1997年から年3回，校則や施設・設備や授業などの学校運営の改善について生徒，父母，教職員が話し合いを行い，合意されたことは職員会議で了承されて実行される3者協議会を続けてきている。3者協議会が発足した同じ年に，地域住民が授業を見て，その後，学校づくりと地域づくりについて，生徒，父母，住民，教職員が話し合いを行う「辰野高校フォーラム」も発足させた。この話し合いで，ゴミのポイ捨てを批判された生徒会役員は学校から通学駅までゴミ箱を設置してゴミの回収を始め，また，各クラス単位で町のゴミ拾いを続けてきた。

すると地域から，町の行事に生徒も参加してほしいという要望が出るようになり，生徒会は町の駅伝や公民館の文化祭に参加していった。

そして，生徒会は方針に「地域との連携」を掲げて，住民アンケートなどで地域の課題について調査を行い，文化祭で町役場や商工会などのみなさんと

「まちづくりシンポジウム」を開催してきた。2003年には「若者にとって理想の辰野町立体模型」を製作し，それを真ん中にして「魅力ある町づくりと市町村合併問題」をテーマに討論した。生徒会長は「これから地域を担っていく中学生・高校生に合併問題を説明してほしいし，住民投票に参加できるようにしてほしい」と述べた。その後辰野町は中学生以上の住民投票を2回実施し，多くの合併反対で自律の道を選択し，その後作った「自律と協働のまちづくり委員会」の委員に生徒会正副会長を委嘱し，生徒はそこでも意見発表していった。

その後も生徒会は5年間，住民アンケートもとりながら「まちづくりシンポ」を続け，「南信バルブ工場跡地利用について」「町立病院の移転改築問題について」「町のゴミ処理と学校のゴミ分別について」「辰野高校についての住民意識について」などをテーマに住民と話し合いをしてきた。町は赤字の町営プールを廃止し，そこに病院をつくる計画を発表していたが，生徒会の調査ではその場所への移転には多くの町民が反対であったため，生徒会長は町助役の前で「子どもたちのために，プールをつぶさないでほしい」と述べ，その後，町は住民意向調査をし，移転先を別の場所に変更した。

2001年の「フォーラム」では町商工会の会長から「辰高生に，駅前商店街の空き店舗を無料で貸すから，お店を開いてほしい」という要望が出された。商業科の生徒たちは経営が成り立つかどうか調査したが無理と判断し，代わりに商店街駐車場でフリーマーケットなどに取り組んだ。

その後は，まちおこしを目的に，町内の製菓会社や弁当会社などと共同して生徒のアイデアによる商品開発に取り組んできた。そして3年前からは商工会の「未来経営人事業」の補助金を得て，念願のコ

コミュニティカフェを冬期間の休日に開店している。コンセプトは、ある生徒が発言した「家に閉じこもっている一人暮らしのお年寄りたちが集い、お茶を飲みながら話せる場所にしたい」である。お茶やコーヒーは無料で、「ホタル丼」（辰野はホタルの名所）などを食べながら会話を楽しみ、帰りには生徒たちが地元の製菓会社と商品開発したお菓子の「チョコっとリンゴクッキー」などをお土産に買って帰れると喜ばれている。

## （２）茨城県立小川高校生徒会の「かしてつ応援団」の活動

茨城県立小川高校は辰野高校の「フォーラム」をモデルにした。2000年にPTA会長の呼びかけで生徒・父母・教職員が学校づくりについて話し合う3者懇談会を始め、続いて、2002年からは公開授業、中学生への学校説明、生徒と地域住民によるシンポジウムという内容の「小川高校フォーラム」を始めた。

生徒会の要求で文化祭を毎年開催にすると、文化祭は町文化協会の展示や小川ばやし保存会やふるさと太鼓などの参加する地域イベントとなり、地域住民が1,000人も参加するようになった。また、総合的学習の時間は「コミュニティタイム」と名付けて、「仕事インタビュー」「地域体験活動」などを実施してきた。

2001年に4分の1の生徒が通学に利用していた鹿島鉄道が赤字による廃線の危機にあることを会社が発表した。生徒会は存続運動を始め、沿線の中学、高校15校の生徒会に呼びかけて、鹿島鉄道沿線中高生徒会連絡会（かしてつ応援団）を結成した。かしてつ応援団は署名活動をし、県と沿線の5市町村へ公的支援を要請して、5年間2億円の支援が決まり当面の存続が実現した。その後、駅への七夕飾り、クリスマスツリー飾り、駅のクリーン作戦、子ども列車などへの協力、駅のトイレ設置要望、集めた募金で駅のペイント、ラッピング列車の運行、中高校生へのフリー切符発売などを続けた。

5年間の公的支援が終了した後、会社は鹿島鉄道線からの撤退を発表して廃線が決まった。そこで、かしてつ応援団は県知事、沿線4市、バス会社に代替バスの運行を要請し、実現にこぎ着けた。高校生たちは集めた募金（総額300万円）でさまざまな取り組みをした。「ガンバレ！かしてつ」というラッピングをして走ってきた列車は、最後に「ありがと

う かしてつ」と貼り替えられて走った。そして、現在は、「かしてつバス応援団」を結成して、バス停に屋根をつけるなどのための募金活動や利用者のための要望活動を続けている。

## （３）北海道美瑛高校生徒会の観光地の美化ボランティア活動

北海道旭川からJRで30分の美瑛町にある美瑛高校もかつては地域と関わりの少ない高校であった。そこで、フォーラムを始めると、町は高校生への支援を始め、生徒会は町の期待に応じて全校生徒で「日本一美しい丘のまち・美瑛」の美化活動を始め、ボランティア活動を続けている。

美瑛町で写真館を経営していて、同窓会副会長を務めている守谷さんは聞き取りに次のように答えている。

「フォーラムの第1回から参加してきましたが、美高フォーラムの効果は、①生徒が意見を言えるようになったこと、②高校生の考え、大人の考えをお互いに分かり合えるようになったこと、③高校生が地域活動をするようになり、街でお互いに挨拶するようになったことだと思います。以前、生徒たちは街の裏通りを通っていましたが、表通りを通るようになったのです。生徒たちは、街の花壇の花植えをしたり、写真甲子園のプラカード・ボランティアをしたり、そして全国から5千人も参加するヘルシーマラソンのボランティアや、カントリー作戦のゴミ拾い、独居老人の家の冬の窓のビニール張りなどを続けてきました。以前より生徒たちは落ち着いて、クラブ活動も盛んになっていると思います。」

## 2. 地域活動は子どもたちを成長させる

これら3校で生徒会役員として活躍した卒業生たちへの聞き取りと、地域活動をしている高校生たちのレポートによって次のような考察をした。地域住民との話し合い、そして地域活動を行うことによって、若者たちは①シティズンシップ（市民としての力）を発達させ、また、②学力を発達させている。

### （１）学力の発達

国内で、子どもの学力が経済資本（家庭の経済力）と文化資本（親の学歴や家庭内の文化）によって強く規定されていることを明らかにしたのは、お茶の水女子大学の耳塚寛明らの研究である。現代社

会では、子どものうちから競争社会に生きていると言われるが、実は格差社会の中では家庭の経済力と親の子どもへの学歴期待で学力格差は作られていて、平等な競争などないと指摘している<sup>iii</sup>。

また、大阪大学の志水宏吉らは、耳塚らの研究に加えて、社会関係資本を「人間関係が生み出す力」と定義し、具体的には子どもたちを取り巻く人間関係の豊かさ、その信頼関係・きずなの強さを表すものと述べて、それが学力に与える効果について研究した。その結果、子どもの社会関係資本の影響力の強さは、経済資本のそれに匹敵するものである。また、経済階層の下位の層においては、社会関係資本の学力への影響力は文化資本のそれよりも大きい<sup>iv</sup>ということを明らかにした。

それでは、フォーラムでの話し合いや地域活動によって地域の人々とのつながり（社会関係資本）をつくっていった高校生たちは果たして学力が向上したのだろうか。

3校で生徒たちの地域活動を支えてきた教師たちに聞くと、「地域活動に取り組んだ生徒たちは成績も向上していった」と述べている。なぜ、成績が向上したのであろうか。辰野高校の生徒たちへの聞き取りと生徒の書いたレポート、感想文から考察してみたい。

#### ① 生徒の学ぶモチベーションにつながっている

辰野高校で町づくりシンポジウムやフリーマーケットを始めた元生徒会長の三澤君への聞き取りでは、「町づくりシンポジウムで町のみなさんと話し合いをしたり、商工会のみなさんとフリマをしたりしているうちに、大学でまちづくりのことを勉強したいと思うようになった。それまで大学進学は考えていなかった。まちづくりについて学べる大学を探していくと神奈川大学の自治行政学科が見つかり、勉強するようになった。そして、町長さんと商工会長さんに推薦状をお願いしに行った」と語っている。住民とのコミュニケーションや協働によって、将来まちづくりをしたい、それを学ぶために大学に行きたいと思うようになり、それが学ぶモチベーションをつくっていったことが分かる。

#### ② 体験による学び

辰野高校の生徒による空き店舗経営は地域活性化という目的と、商業科の生徒のマーケティングの学

習という2つの目的をもって行っている。その活動に関わった生徒たちのレポートから活動と学力向上との関係について考察してみる。

3人のレポートでは、「最初はみんなあまり乗り気ではなかった」のが、商工会の担当者から説明を聞いて「若者の流出を防ぐことで地域の過疎化を解決するためのいい手段だと思い」「やる気がわいて」きて、「打合せて副町長さんと会ったり、仕事は大変だったが、町の人たちから激励の言葉をもらい、苦手だった人前で話すことを進んでやりたいと思うようになった」。そして、「仕事で悩んで、商工会の人から教えてもらったABC分析（在庫管理の分析法）をして仕入れの改善をし、地元新聞の記者からKJ法（データ統合による発想法）を学んでデータやアイデアをまとめ、新たな発想を生み出すことや課題が見えてきた」と述べている。つまり、地域の人から学ぶことによって活動の意義を理解してモチベーションを高め、地域の人との交流でさらに意欲的になり、学校では学べない専門的な知識を地域の人から得て活動に活かしていくという学力を獲得していったことが分かる。

#### ③ 地域で学ぶこと、地域を学ぶことの意義

アメリカの進歩主義教育の理論的指導者であったジョン・デューイは学習を「共同生活への参加」として定義したが、地域で学ぶこと、地域を学ぶことについて次のように述べている。「コミュニティにおいて蓄積され伝達された知的資源によって、個人の理解力と判断力を拡大強化することは、地元地域のコミュニティにおける直接的な相互の交わりの関係においてのみ実現可能になる。」<sup>v</sup>

このデューイの言葉は、東日本大震災での津波被害とその防災対策を思い起こさせる。歴史的に繰り返されてきた津波被災についての言い伝えの聞き取りや文献調査、宮古市姉吉地区にあるような「此処より下に家を建てるな」などの石碑調査などが防災対策としていかに大切であったかということである。地域を学ぶことは、災害時に命を守るための「理解力と判断力」にも結びつくことなのである。

辰野高校の図書委員会の生徒たちは辰野町の歴史・地理・産業・お祭りなどの文化・人物、そして辰野高校の歴史・教育を調べて『辰高・辰野町検定一君は辰高・辰野町を知っているか―』（118頁）という冊子をつくり、学校内で生徒に、町に出て住

民に検定を実施してきた。自分たちが地域について学ぶだけでなく、学んだことを検定問題にして、まわりの生徒や地域の住民にご当地検定という形で地域学習を広げていったのである。

辰野高校では地域に出て学ぶ授業を多く行っているが、福祉・保育系進学コースの生徒たちは地域の福祉施設や保育所で実習もしている。その生徒たちのレポートである。

Aさん「実習に行くことが多く、現場の雰囲気などを感じられて、この先短大に行って介護について学ぶのに少しでも活かすことができそうです。今まで高齢者や障がい者の人について考えることがあまりなかったけれど、コースで学びはじめてから、ニュースで高齢者問題などを見ると考えるようになった。」

Bさん「この3年間で私が成長したところは、『考える』ことをするようになったことです。今まで、分からないこと、知らないことがあったら、別に知らなくてもいいかとあきらめることが多かったけど、今では分からないことがあったら、調べて理解したいです。これから介護の仕事をしていくうえで、分からないことを分からないままにしておくはいけないから、ちょっとしたことでも調べる、そして理解していきたいです。」

Cさん「宅老所などに行って、利用者さんと接して、心がほっこりした。授業に集中することもできるようになったと思う。」

これらのレポートからは、地域の人の中での実習は、コミュニケーション能力を向上させているとともに、生徒たちの「考えること」「調べること」「授業に集中すること」などの力が向上する効果をもたらしていることが分かる。

地域づくり参加や地域での学習で生徒たちの学力が向上したのは、以上のように地域住民との人間的なつながり（社会関係資本）による効果が大きかったと分析できる。

## (2) シティズンシップの発達

シティズンシップ教育はイギリスで2002年からすべての中学・高校で実施されているのをはじめ、21世紀になり世界的に取り組まれている。シティズンとは、権利としての市民権の意味と、資質としての市民性という意味とがあるが、シティズンシップ教育は市民としての権利を自覚した市民性を育む教育

といえる。

小玉重夫は『シティズンシップの教育思想』で、アメリカのミネソタ大学ハンフリー公共政策研究所のハリー・ボイトの「奉仕活動としての教育にもとづくシティズンシップ」と「組織活動としての教育にもとづくシティズンシップ」という2つのシティズンシップ論を紹介している<sup>vi</sup>。このボイトのシティズンシップ理論によって高校生たちのシティズンシップが発達したのかどうか分析したい。

ボイトによると、「奉仕活動としての教育<sup>vii</sup>」にもとづくシティズンシップの定義は「ボランティア」であり、辰野高校のゴミ回収や美瑛高校の地域美化活動はこれに当たると言える。また、「組織活動としての教育」にもとづくシティズンシップの定義は「パブリック・ワーク」（社会的な問題の解決をめざして、多様な立場の人々と協働すること）であり、辰野高校の地域問題調査とまちづくりシンポジウム、小川高校の通学鉄道を守る活動はこれに当たると言える。

### ① 地域ボランティア活動によるシティズンシップの発達

ボイトは「奉仕活動を中心とするシティズンシップ論」は同質的な凝集性を高めることで悪に対抗する善の共同体という「二元論」的な対立図式を持ち込もうとするものであるとして批判的で、二元論ではなく「多様な利害と権力のダイナミックスの行使を伴う市民的行為の政治的次元」を顕在化する「組織活動としての教育」を重視している<sup>viii</sup>。

確かに、「奉仕活動としての教育」は「組織活動としての教育」より、シティズンシップ教育における政治性が弱いという弱点がある。しかし、生徒会長として全校ボランティア活動を始めた美瑛高校元生徒会長の吉川君への聞き取りからシティズンシップの発達が確認できた。

彼は調理師の免許を持っているが町の中には仕事がなく、他の若者が町から出て行く中で、それでも地域に残り、ガソリンスタンドで働きながら、町の太鼓サークルの副会長として町で演奏して町民に喜んでもらうことを楽しみとしている。観光客に頼るのでなく、地域の内発的な活性化を望んでいて、高校の生徒会活動で体験的に学んだ「一人ひとりが主役になれる」町づくりをしていきたいと述べていた。

生徒会のリーダーが地域づくりのリーダーとして

成長していく過程とともに、守谷さんの言葉から、一般の生徒たちも地域ボランティアへの参加によって堂々と表通りを歩き町民と交流できるように成長した過程が示されている。民主主義的な地域ボランティア活動によって高校生たちはシティズンシップを形成し、向上させていったことが分かる。

## ② パブリック・ワークによるシティズンシップの発達

一方、辰野高校生徒会の地域問題調査とまちづくりシンポジウム、小川高校生徒会の「かしてつ応援団」の活動は、学校のある地域の問題を解決し、また自分たちの通学の交通機関を守るという「パブリック・ワーク」であり、「組織活動としての教育」である。

ボイトは、ボランティアの動機は「利他主義」であり、目的は「問題解決」、その結果は「プロジェクト<sup>ix</sup>、レポート」であるとして、パブリック・ワークの動機は「自己利益」であり、目的は「民主主義的権力と民主主義的生活様式の建設」、その結果は「文化変容、人間変容」であると分析している<sup>x</sup>。

辰野高校生徒会の活動は学校のある地域を魅力的なものにしたい、小川高校生徒会の活動は、自分たちの通学鉄道を守りたいという「自己利益」が動機であった。その目的は快適なまちづくりであり、公共交通機関による通学を継続するということであり、「民主主義的生活様式の建設（存続）」といえる。

小川高校の生徒たちは長い活動の結果、鉄道は守れなかったが、代替バスの運行を実現させた。これはひとつの「民主主義的権力の建設」であり、「文化変容」ももたらした。そして、活動に参加した中・高校生たちの「人間変容」をももたらしたことは聞き取り証言から分かった。5人の元生徒会役員の若者たちが述べていたのは、初めは鉄道廃止について半信半疑だったが、存続が厳しいことが分かってくると「頑張るようになり」、町の人たちの応援や協力を受けて「本気で頑張れた」。活動を通じて、さまざまな活動をしている大人と「知り合い」、「触れ合い」、中には「かっこいいなと思ひ、そういう大人になりたいなと思った」生徒もいて、「誰ともコミュニケーションをとれるようになり」、「駅前などで活動している人に協力するようになり」、今は働いていてなかなか時間がとれないが「地域への関心があり」、「時間がとれたら活動したい」というこ

とだった。このプロセスは辰野高校の生徒たちも同じである。

辰野高校生徒会と小川高校生徒会の活動は、地域問題の解決、鉄道の存続という「公的問題解決」のために、辰野高校は商工会との協働、かしてつ応援団は存続運動の他団体との協働という「連合体の創造」をはかり、「公共的課題に関して、他者と一緒に働く際に必要となる、技能・習慣・態度・価値を」、存続運動という「プロジェクトを通して学習」し、「公共的価値を有する物事の共同創造者」というシティズンシップを獲得していくという、ボイトの主張している「パブリック・ワーク」であったことが結論づけられる。

このような事例から、地域づくり参加は若者のシティズンシップを発達させる効果があると言えよう。

## 注

<sup>i</sup> 1973年ユネスコ「中等教育についての勧告」、1994年ユネスコ「国際教育会議」文書など。

<sup>ii</sup> この論稿のもとになっているのは、日本教育政策学会年報第21号（2014年）掲載の拙稿と、宮下与兵衛編著『地域を変える高校生たち—市民とのフォーラムからボランティア、まちづくりへ』かもがわ出版、2014年、である。

<sup>iii</sup> 耳塚寛明「誰が学力を獲得するのか」『お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学学力とトランジションの危機—閉ざされた大人への道—』耳塚弘明・牧野カツコ編著、金子書房、2007年、19頁

<sup>iv</sup> 志水宏吉・中村瑛仁・知念渉「学力と社会関係資本—「つながり格差」について」『学力政策の比較社会学 国内編—全国学力テストは都道府県に何をもたらしたか』志水宏吉・高田一宏編、明石書店、2012年、68頁

<sup>v</sup> ジョン・デューイ『公衆とその諸問題』ハーベスト社、植木豊訳、2010年、206—207頁

<sup>vi</sup> 小玉重夫『シティズンシップの教育思想』白澤社、2003年、167—169頁

<sup>vii</sup> アメリカでは生徒がコミュニティで活動して公民学習していく教育方法を「サービス・ラーニング」と言う。これは1990年の「国家およびコミュニティ・サービスを促進するための法」成立以後に全国展開した。

<sup>viii</sup> 小玉重夫『シティズンシップの教育思想』169頁

<sup>ix</sup> 生徒による問題の発見、問題の分析、問題の解決という一連の学習プロセス

<sup>x</sup> Harry C. Boyte (2004) "Everyday politics: Reconnecting Citizens and Public Life", University of Pennsylvania Press, pp108